

シンポジウムを終えて

井上輝子

私は和光大学で35年間、女性学を講じてきましたが、授業の中では女性学の歴史や和光大学の試みの意味をまとめて話す機会がありませんでした。今回、現代社会学科の企画として、私自身の35年間の歩みを振り返る機会を与えられたことに感謝します。準備期間が短かったにもかかわらず、川崎市教育委員会の連携事業ならびに町田市教育委員会の後援を得ることができ、また和光大学ジェンダーフォーラムと共催で関連展示を実施することができました。

私の基調報告に加えて、学外から3人の講師をお招きし、報告と討論をおこないました。70歳を間近にした井上に対して、DV問題の現場で仕事を続けてこられた60代の阿部さん、50代のマスコミ研究者の諸橋さん、若い世代からのウーマンリブ論を展開されてきた40代の千田さんという組み合わせで、討論は多岐にわたり、充実したものになりました。特に当事者とは誰なのかという問いは、女性学にかぎらず、当事者性を掲げる学問において、今後考えるべき問題を提起できたように思います。女性という当事者の問題意識から離れて、階層や民族と並ぶ、純粋な分析概念として「ジェンダー」概念を使用して、客観的な社会分析をすることが一方では求められつつ、他方で女性が直面している現実の問題に、研究が還流する道をどう担保するのかということは、女性学にとって大きな課題といえます。このシンポが、そうしたことを考えるきっかけとなれば幸いです。

埼玉や千葉、さらに北海道からも卒業生が駆けつけて下さったほか、川崎市や町田市在住の方々、女性学の研究者、行政関係の方など、約100名に及ぶ多様な皆様がお集まりくださり、5時間もの長時間にわたる討論に、熱心に耳を傾けていただいたことを、本当にうれしく思いました。アンケート等で聞かれた感想の中には、自分がフェミニズムだと思っていたのは、実は第一波フェミニズムのことで、フェミニズムがこんなに多様で柔軟なものだとは知らなかったという声も、複数聞かれました。それだけでも、この集まりを持った意味があったと私は思います。

シンポジストの方々、参加者の皆さん、そして裏方で支えてくださった教員や職員の皆さん、本当にありがとうございました。